

<図書館教育>

公立図書館との連携による図書館教育の充実 ～進んで図書館を利活用し、自分の学習や生活に生かす子の育成～

大垣市立墨俣小学校 高間 祐子

概要

本校の学校教育目標は、「自分から正しく判断でき豊かな心で世界へはばたく子」である。それを踏まえて、図書館教育における大きな柱を「図書館を進んで利用し、自分の学習や生活に生かす子」とし、本校では、3年前から公立図書館と連携をはじめ図書館教育の充実を図ってきた。それにより、児童が進んで図書館を利用するようになってきた。児童の図書貸し出し冊数は令和元年度は55.6%増加したが、令和2年度はさらに66.7%に増加した。公立図書館を利用する児童数も増えてきた。しかし、図書館を児童自ら利活用しているとはまだまだ言えない。読書の習慣は身に付いてきているが、読む本に偏りがあつたり、自分の課題追求に必要な資料や情報を自ら選んだりすることに課題がある。そこでさらなる図書館の利活用推進のため、児童の発達段階に応じて、学校（学校図書館や学校司書、司書教諭など）、家庭、地域（公立図書館など）のそれぞれの取組を追求していく必要があると感じ、次の3つの取組をすることにした。その内容は、①読書活動の創意工夫、②学習活動の創意工夫、③情報機能の創意工夫である。本実践研究は、図書館教育の充実を学校経営計画に掲げた校長の方針を受けて、図書館教育主任として悪戦苦闘した記録である。

1. 主題設定の理由

(1) 教育の今日的な課題

我が国と北欧各国の図書館の意識は大きく違っている。北欧各国は一貫して、格差のない平等な社会の確立を社会政策の中心課題として掲げてきた。その中で、公共図書館は、情報への平等なアクセスを確保し、社会的に認知され、生涯学習の拠点として国民から高い信頼を得ている。北欧各国では、幼い頃から保護者に連れられて公共図書館に行き、学齢期になると自ら学校図書館と親しむようになり、それから、生涯にわたって図書館を利用することになる。北欧各国の市民にとって、図書館とは、生活に欠かせない施設である。一方、我が国の公共図書館に対する市民の意識は、まだ低い。我が国における図書館数は、令和元年度には3,296館。設置率は、都道府県立100%、市（区）立は98.0%、町立は59.3%と高く、どの地域にも公立図書館が設置され、大変利用しやすい環境にあると言える。しかし、令和元年度における貸出冊数は、約6億3千万冊となっており、これは、国民一人当たり年間5冊ほど図書館で貸出しを受けている状況だ。（図書館に関するデータ出典：令和元年度「社会教育調査」）これは、市民

が図書館を生涯学習の一部として十分に役立てていないことになる。学校図書館や公立図書館では、未来を切り開く子どもたちに、幼い頃から「生涯にわたって学び続ける」という礎を築いていく必要がある。

(2) 児童の実態

読書に前向き 本校の児童は、読書に対して前向きであり、図書館に通うことも好きである。一方で、ほぼ読書をしない児童も存在するなど、読書量にばらつきがある。また、高学年になるほど、読書時間を確保することが難しくなり、図書館に足を運ぶ機会が減少していること、コロナ禍で密を避けるために、図書館に行く時間が限られていることなどが課題である。

本校が公立図書館との連携を始めたのは、3年前からであり、この取組により、意欲的に双方の図書館を活用して、主体的に読書や学習に取り組む児童が増えてきた。しかし、児童が公立図書館に自発的に利活用しているとはまだ言えない。令和3年度5月に行った児童アンケートによると、自分の公立図書カードをもっている児童は全校児童数35%（271人中94人）、公立図書カードを所持していない児童は保護者のカードを使い、本の

貸出をしているものが大半であった。また、公立図書館に行く頻度は平均して、月に1度程と低く、児童の図書館の利用は保護者の意識によるところが大きいことが分かった。このことから、学校図書館と公立図書館のさらなる連携により、児童の発達段階に応じて、学校（学校図書館や学校図書司書など）、家庭、地域（公立図書館や地域の読書サークルなど）のそれぞれでの取組を追求していく必要がある。

（3）教師の実態

本校の学校経営方針には、図書館教育の充実が挙げられている。それを受けて、各教師も図書館教育の重要性を認識している。さらには、学校図書司書と連携し、教科でも積極的に図書館を利用している。しかし、図書館の資料を目的に応じて処理するなどの図書館利用指導に弱さがみられる。

（4）めざす児童の姿

意欲的に図書館を利活用して、主体的に読書や学習に取り組む児童。生涯にわたって、自分の目的に合った資料や情報を収集し、目的に応じて処理したり、自らの生活に生かしたりすることができる児童。

2. 研究仮説

公立図書館との連携を柱とし、公立図書館と学校図書館の共有・共通化を推進すれば学校図書館の3つ機能【研究内容1～3】の充実を図ることができる。

3. 研究内容

【研究内容1】読書センターとしての機能の充実

- ① 帯出カードの共通化 公立図書カード学校図書カードを共通化にし、1つのカードで本を貸し出すことができるシステムを整える。
- ② 魅力的な本の紹介 地域の読書サークルや公立図書館、PTAによる魅力的な本の読み聞かせを定期的に行う。
- ③ 読書手帳の共通化 学校図書館でも公立図書館（墨俣図書館）でも利用できる読書手帳を継続し活用する。
- ④ 図書館活動の充実 児童が主体的に図書委員会活動に取り組み、魅力的な図書館行事や活動を行う。

- ⑤ 足を運びたくなる図書館環境づくり 児童が図書館に来たくなる季節感あふれる掲示やディスプレイを充実させる。

【研究内容2】学習センターとしての機能の充実

- ① 図書館の機能を生かした授業 児童が教科に関わる本に親しみ、自ら読み進めることで、深い学びにつなげる。児童にとって魅力的で有用な本を公立図書館から学校図書館に配本する。
- ② 学習の表現の場としての図書館 来館者が利用できるように、学習の成果やまとめを図書館に保存したり展示したりする。
- ③ 調べ学習図書リストの作成 写真付きの検索性資料リストを整備し、教師が教科で図書の本を利用しやすくする。
- ④ School-e-Library の活用 学習や読書活動に School-e-Library 電子書籍を導入し、読書の幅を広げる。

【研究内容3】情報センターとしての機能の充実

- ① 図書館利用指導の共通化 墨俣図書館で公立図書館司書が学年の実態に応じた図書館利用指導の授業を行う。
- ② 今日の話提供 昨今話題になっているテーマについて取り上げ、掲示する。

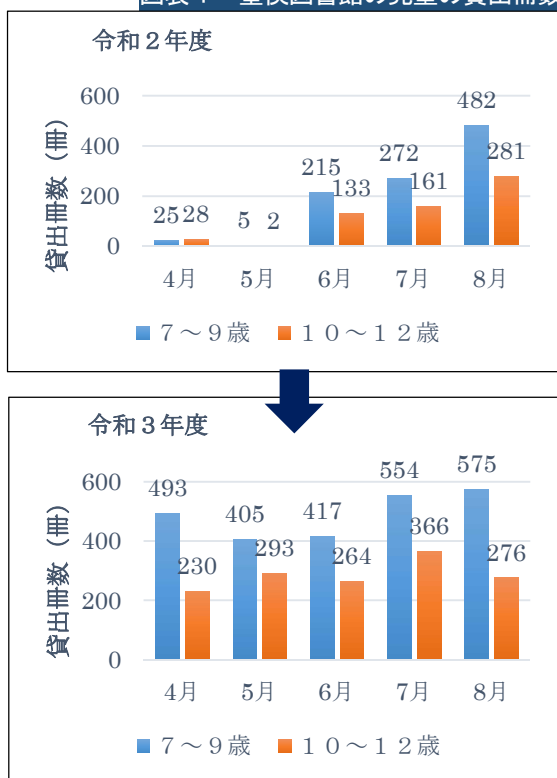
4. 研究実践

1-① 読書手帳の共通化 墨俣小学校では読書ファイルに読書のあしあとを残している。しかし、学校図書館での利用に限られ、読書生活すべての記録にはなっていなかったことから、本校では、3年前から継続して、墨俣図書館と学校図書館の読書手帳を共通化し、児童の読書生活のすべてを記録できるようにした。児童の実態にあわせて、手帳1冊に25冊分のタイトル・ひと言感想を書き溜められるようにした。また、学校の本でも、墨俣図書館の本でも書いてよいこととし、手帳がいっぱいになったら、墨俣図書館に持って行くと、手作りの葉がプレゼントされるようにした。読書手帳の取組を継続して行うことで、読書手帳共通化の取組が保護者へも周知され、児童が保護者とともに墨俣図書館に来館することが多くなり、

保護者・児童ともに、墨俣図書館の来館者および帯出数も増えた。結果、読書意欲の向上につながった。

公立図書館の利用増 5月に公立図書館貸出カードの利用について児童アンケートを行った。この結果から、35%（全校児童数271人中94人）の児童が公立図書館の帯出カードを所持していることがわかった。また、今はカードを持っていないが、「つくりたい」という児童も多くいたため、今年度から、学校の教育活動の一環として、墨俣図書館へ行き、公立図書館の本の貸出や利用指導を行うことにした。このことを保護者に伝え、児童本人の図書カードを作成することを勧めた。これにより、96%（全校児童数271人中、260人）がカードを所持することになった。取組を通して、児童は墨俣図書館に興味をもち、日常生活でも足を運ぶようになったといえる。

図表1 墨俣図書館の児童の貸出冊数



1-②図書館活動の充実 毎年、秋には児童会図書委員会主催の図書館祭りを行っている。本校の図書館祭りは、3年前から、公立図書館で行われている活動や企画を学校図書館にも取り入れている。今年度の11月末に行った「図書館祭り」での例を述べる。

本のスタンプラリー

〈ラリー1：校長室〉「SDGs」の展示を行い、児童および来校者等に自由に閲覧、学習できるようにした。また、郷土作家の「市川里美展」も同時に行った。公立図書館で開催される企画展は児童にとって興味・関心のあるものも多くある。そこで、企画展の展示内容を学校図書館でも活用し学習に生かすようにした。

〈ラリー2：多目的室〉公立図書館司書や地域の読書サークルによる本の読み聞かせを行った。

〈ラリー3：図書室〉クリスマス風に模様替えし、テーマ別にラッピングされた本（お楽しみ袋）を選んで読むようにした。

校長室、図書室、多目的室の各ラリーでスタンプがたまり、すべてに参加すると公立図書館オリジナルの菓子をプレゼントした。スタンプを集めることは児童の興味を引き、普段は外遊びしかしない児童も、校長室に寄ったり、お楽しみセットを借りたりして本に親しんだ。

ミニ図書館 コロナ禍で自由に図書館を出入りする時間帯を限っているため、児童会図書委員会の活動として、教室に小さな図書館を届けることにした。学年に応じたいろいろな分類の本を読み親しむことをねらいとしている。図書委員が本を選択し、月に1回各教室に「ミニ図書館」の中身を入れ替えることで、普段自分では選ばない本を教室で読む児童が増えた。また、図書委員児童の選書の視点も高まった。

1-③足を運びたくなる図書館環境づくり

図書館を視覚的に楽しい環境にするために、3年前前の図書館祭りから継続して、公立図書館に展示物の協力をしてもらっている。掲示物などを借用したり、部分的に工夫を加えたりすることで、児童が図書館に行ってみようという環境を整えることができた。



写真1 図書館祭りの飾り

令和3年度の図書館祭りでは、クリスマス間近の時期だということもあって、図書館に入っすぐに大きなクリスマスツリーを設置した。**目的に応じたコーナーづくり** 季節に関するコー

ナーや災害のコーナー、新刊コーナー、人権月間では、人権に関わる本コーナーなど、児童が本を手に取りやすいように展示の仕方を工夫した。

1-④帯出カードの共通化 学校図書館にも公立図書館にも、それぞれの帯出カードがある。利用者は2枚のカードを持っていてそれを使い分けなければならない。この煩雑さを解消するため、学校図書館と公立図書館帯出カードを共通化にし、1つのカードで本を貸し出すことができるようにした。このことで、双方の図書館の利活用がさらに進むと考えた。また、返却も公立図書館まで行かなくても、公立図書館で借りた本を学校で返却できるようなシステムを整えることで、ますます双方の図書館の利用が進んだ。公立図書館を利用する児童が増加した。

1-⑤魅力的な本の紹介 児童にとって、魅力的で有用な本を自分で探し出すことは難しい。子どもたちの本の世界を広げたり、普段自分では手に取らない本の中に、おもしろい世界があることを知ったりしてほしいという願いから、学校図書館と公立図書館では、次の取組を行った。

今年度の図書館祭りでは、学年に合わせた「おはなしの時間」を行った。

〈低学年〉地域の元館長によるクリスマスのお話「サンタさんがやってきた」を読んでもらった。ここでは、クリスマスにちなんだ本の読み聞かせやクリスマスソングを楽しく歌った。クリスマスプレゼントとして、市立図書館の本の中身がみえないようにして包んだ「おたのしみ袋」をサンタから手渡しで子どもたちに渡すことをした。

〈中学年〉地域の読み聞かせボランティアサークルの「墨俣むかし話キャラバン隊」の方に墨俣の昔話の紙芝居をしてもらった。

〈高学年〉現図書館職員の方に「お城のおはなし」について講話をしてもらった。

このような取組により、公立図書館とのコラボ図書館祭りはとても賑わい、いつも以上にたくさん本の貸出がされることとなった。「おはなしの時間」は子ども達からだけでなく、本校の教員か

〈図書館祭り期間12月の帯出数〉
2020年 2,593冊
2021年 2,803冊(↑390冊増加)

らも、大変嬉しい意見を多く聞くことができた。

〈低学年の教員 A〉サンタさんからのお話と歌のプレゼントは季節感があり、子ども達も大喜びだった。

〈中学年の教員 B〉墨俣に関わる紙芝居であったため、町探検に行った場所ともつながって、子ども達は興味深く話を聞くことができた。

〈高学年の教員 C〉社会見学の内容や総合の地域学習と関連する話であったため、さらにくわしく分かって良かった。

おすすめの本 これまでは、おすすめ本の紹介は学校独自で行っていた。学校が公立図書館から本を借りることはあったが、それは学校から要望した本に限られていた。墨俣図書館と共通の読書手帳に取り組む児童のためにも、公立図書館からの新刊のおすすめ本や話題の企画本等を「すのまたおすすめ本リスト」として作成し、全児童に配布した。

読書郵便 児童会図書委員会が主体となって、6月に「思いを届け、墨俣ぼかぼか読書郵便」を行った。自分が好きな本を読んで欲しい相手に一言メッセージを添えて送り合うものである。このことで、児童はより主体的に本を手に取り、本のおもしろさを伝えていく力を身に付けることができた。また、本を視点に沿って読んだり感想文や紹介文を書いたりする力も付いてきた。上手に書いているものは、図書館に掲示することで、児童の読書意欲にもつながった。

研究内容 2-① 図書館の機能を生かした授業

学校図書館は、学習センターとして、学習活動を支える役割がある。特に国語科の授業では、並行読書や調べ学習による言語活動の充実が求められている。学校図書館の蔵書だけでは本の種類や数に限りがあるため、公立図書館に協力してもらい、準備してもらっている。

学習に使う本コーナー 昔話・民話などは、複数の学年の教科書で扱いがあることから、図書室内に大きくコーナーを設置した。その他、道徳教育に関わる本、俳句に関わる本、児童の作品をまとめ、児童も教師も分かりやすいように配架した。

研究内容 2-② 学習の表現の場としての図書館 授業で作成した作品や作品集を児童自身が読むこ

とができるように、児童の作品コーナーを設置している。身近な仲間や先輩たちが創作したものから学ぶこともあり、児童たちの関心も高い。

研究内容2-③ 調べ学習図書リストの作成

学習活動を支える一つとして、特に国語科の授業では、並行読書や調べ学習による言語活動の充実が求められている。

本校では、国語科を研究する中で、研究内容の1つに学校図書館の活用が位置づけられている。学校図書司書と連携を図り、教科、単



写真2 調べ学習図書リスト

元ごとに図書リストを作成し、教員が学校図書館の機能を有効に活用するための重要な役割を果たしている。教員も利用しやすい図書室であることが大切であると考え、学年毎の「調べ学習図書リスト」を作成した。教員にとっても使いやすい図書館となり、教科で図書の本を使用する時間数が増加した。

研究内容2-④ School-e-Libraryの活用

授業で図書室や、図書資料を活用している、年間の時数

2019年	2020年	2021年
100時間	175時間	185時間

(全学年合計)

長引くコロナの禍の影響もあり、非対面的・非接触的で読書ができる電子書籍に対する関心が高まってきている。学校図書館の現場において電子書籍の導入をしている割合は小学校 3.3%、中学校 2.5%、高校 1.6%と極めて少ないが、GIGA スクール構想により一人一台タブレット端末の配備があることで、電子書籍も今後シェアを広げていくのではないかと考えられる。本校は、今年度から School-e-Library、電子書籍を学校に取り入れることになった。図書館では、電子書籍の貸し出しをしている。電子書籍を利用することで、通常、図書館にはクラス人数分の同じ本を配備することは難しいが、電子書籍なら同じ本を一斉に読むことができる。例えば、3年生の国語科「ことわざ調べ」では、ことわざの本を電子書籍で検索し、

調べ学習として使っている。また、低学年では、教師が大型テレビに絵本を映し出し、本の読み聞かせとして利用することが多い。タイトルだけでなく本の表紙を見て想像を広げ、興味の幅が広がる。図書館には置いていない本を読むことができたり、一斉に調べ学習ができたりと、大変有効であると実感している。本校の図書館の蔵書数は12946冊(図書標準の達成率147%)だが、電子書籍を合わせると13946冊にまで増えた。

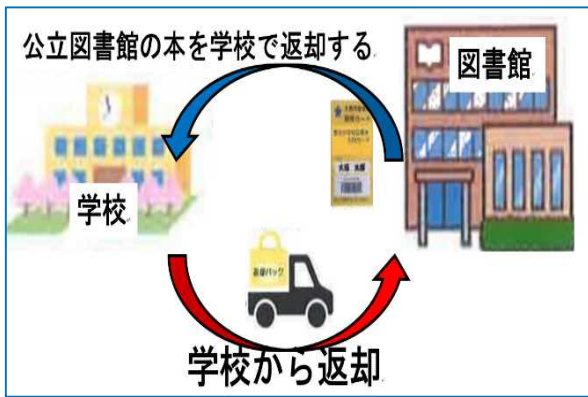
研究内容3-①図書館利用指導の共通化

墨俣図書館は近くにあるため場所は知っているが、実際に利用している児童は少なかった。そこで、令和元年度から、学年ごとに墨俣図書館での校外学習を行い、図書館の利用指導を行った。学校図書館との共通点と相違点を明安心して公立図書館を利用することができるようになった。また、公立図書館司書が各学年の実態に応じたブックトークや読み聞かせを行った。児童は学校図書館と比較しながら、館内を見学したり、各ブースで読書を楽しんだりした。今後の利用につながる内容となった。このような図書館利用の共通化により児童の読書冊数が増加した。利用指導の共有化を始めたことで、借り方が分からない児童は減った。

自分の公立図書カードを持っている	持っていないが家族のカードで本を借りている
35%	63%

公立図書本の返却システム作り

次の段階として、実際に自分で借りることができるようにするためには、保護者の協力も必要である。例えば、入学した時点で、保護者にも墨俣図書館の利活用について周知を図るなど工夫したい。そこで、今年度から、公立図書カードをすでに持っている児童、そうでない児童の調査を行った。持っていない児童には、保護者の同意の下、公立図書館に協力してもらい、カードの発行を学校が推進した。このことで、今までは保護者のカードで本を借りていた児童も自分のカードで本を借りられるようになった。昨年度と比べ、墨俣図書館の本の帯出数が増加した。また、今年度から、学校から校外学習として墨俣図書館へ行き、自分の公立図書カードで本を借りる体験をした。借りた本は、学校で返却できるシステムを作り、公立図書館と協力して本を返却しやすい体制を整えた。



研究内容3-②今日の話提供 児童にとって、学校図書館は、情報の収集・選択・活用能力を育成したりする「情報センター」としての機能を有している。学校においては、このような学校図書館に期待されている役割が最大限に発揮できるようにすることが重要である。今年度の図書館祭りでは、「SDGs」をテーマに、学校全体で取り組んだ。

SDGsの展示パネルを公立図書館から借りて、図書館に展示した。学校の図書本だけではSDGsに関わる本が少ないため、公立図書館から借り、児童に貸出を行った。ただ、展示するだけでは児童の興味関心を引くことはできないため、SDGsの冊子を配布したり、SDGsの展示を校長室に設け、身近にあるSDGsマークを見つけたり、SDGsの啓発ポスターを募集したりした。このことで、児童の関心が高まり、楽しく学習することに繋がった。



写真3 SDGs啓発パネルの展示

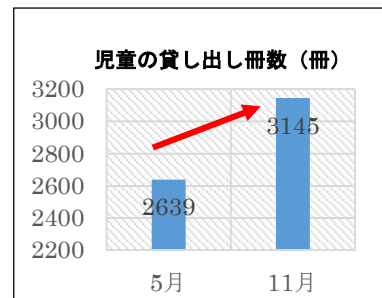


写真4 児童が描いたSDGs啓発ポスター

5. 展望

成果1. 児童の読書に対する意識や興味が高まってきた。

図表2から、今年度の5月と11月の貸出冊数の比較をみると、読書の量が高まっていることが分かる。また、児童アンケートの結果から、図書館祭りの前後では、図書館に行きたいと思う児童が増えたことが分かった。



図表2 令和3年度貸し出し冊数

ートの結果から、図書館祭りの前後では、図書館に行きたいと思う児童が増えたことが分かった。

成果2. 図書委員の主体的な活動により、読書への意欲付けや読書の質を高めることにつながった。図書館祭りの分類ビンゴカードやミニ図書館や読書郵便の取組によって、いろいろな分類の本を自ら選んで読む児童が増えた。

成果3. 学校図書館と公立図書館との連携により、児童の双方の図書館利用が進んだ。

校区にある市立図書館と連携することにより、公立図書カードの交付や、校外学習での公立図書館利用指導、共通の読書手帳などの取組が可能になった。このことにより、双方の図書館利用が保護者や児童ともに増えた。公立図書館を利用する経験を重ね、市立図書館が身近な存在となっていった。

課題 学校図書館と公立図書館との連携による可能性を広げ、大垣市内の公立小・中学校に利活用のさらなる推進を図ること。

本校の実践や公立図書館との連携による可能性を、市内の小中学校に広め、推進を図っていくことで、児童が生涯にわたって図書館を利用する力を身に付けさせたい。

児童の読書の質を向上させること。

個人の読書記録の累積は、個人の知の財産の累積でもある。そのため、それに基づいた個に応じた指導を進めることで、児童の質を向上させ自分の学習や生活に生かす子の育成をしたい。

(参考文献)

- ※1 図書館に関するデータ(令和元年度社会教育調査)
- ※2 デンマークのにぎやかな公共図書館(新語論 吉田右子)
- ※3 2021年学校図書館調査報告